

は、ババの行った沢山の事例を出来るだけ広い範囲にわたって記述し、心を開くようにすすめ、また研究者には、神の心とは、愛とはどの様なものであるか、サイ・ババが身を持ってそれを実証しようとしているのが感じられる。

最後に、この奇跡の人サイ・ババの教えについてふれてみよう。サイ・ババの教えは、人の本質は靈魂である、ということにつきる。人は肉体ではない、単なる仮初の衣である肉体を自分であると思ってはならない。この真理を、様々な比喩、類似や日常的な例を使いながら、悟らせようとするのだ。例えば、サイ・ババは次のように言っている。

「あなたは、何ものにも負けない無敵のアートマ『靈魂』である。アートマは、人生の浮き沈みによって変ることはない。あなたは道を歩く時、自分の影がごみや埃、藪や茨、岩

や砂の上を通っても少しも心配しない。それと同じく、アートマが本質であるあなたは、自分の肉体という影が如何なる運命を辿ろうとも全く心を煩わせることはない。」

これは心靈思想の啓蒙であり、心のとびらを閉じた多くの人々の心を開く様々な説話の一つであると言えるのではないだろうか。我々がこの本から多くの事を学ぶことが出来る、というのはこのことである。

サイ・ババは今年五十八歳、まだまだこれから多くの人々の教化をなし、多くの人々を救ってくださるよう祈りながら、稿を終らせて頂くことにする。感謝。

(東京都、会員)

■訳者私家版、一九八三年七月二十日刊。
小B6判、三四二頁。一二〇〇円。

書評 ● 水神祥著 『水神伝説』

靈的自己の確立のための神話的小説

鶴岡賀雄

本書は神秘思想、神秘学の気鋭の研究者として既に評価の高い水神祥氏による、「言語芸術作品」(と一応よんでおく)であり、奥書に「本書は昭和五〇年四月から昭和五六年三月の間に書かれた」とあるように、著者の二十代後半を通じて

持続する志のもとに刻まれていった、一種の青春の書である。ごく簡単にその「内容」を記せば、「私」(水神佳彦)著者の神話的次元での分身)と、双生の妹佳苗の出生から、「神の嫁」となった妹の死に帰天、そして地上に残された佳彦の流

謫の思いと佳苗の靈との交わりまでの出来事を、一応の物語の枠組とする。が、その物語の展開する地平は、広い意味での「神話」ないし「伝説」のそれであって、いわゆる「小説」のそれではない。

神話はしばしば現実の地名や山河に結ばれて語られる。同様に本書も専ら現実の賀茂川付近を舞台にしてはいるが、その物語の全体はそうした現実を最下層に含みつつ、神話の古代、形而上学的靈界の全体を包括する時空的重層性をもって動いてゆく。そして嘗て、神話を語ることによって、それを語る人々の現実の時間と宇宙の中での位置が定められ、意味づけが与えられていたように、本書が著されることによつて、著者水神氏のこの世における位置、あり方が宇宙論的拡がりの中で定められていったのであろう。本書を「青春の書」と呼ぶのもこうした意味からである。「水神伝説」は、或る時期の著者の靈的アイデンティティを確立する「個人的神話」であるといえる。

しかし、現代において「神話」を語ることは、いかにして可能なのか。神話とは元來集団的なものであり、「個人的神話」とは形容矛盾ではないだろうか？——本書のもつきわめて特異な「形式」は、この課題、この問いに著者がいかに応えていったかを示すものと思われる。そもそも、本書は今日行なわれている尋常の文芸ジャンルに収まるものではない。

「小説」、「抒情詩」、「叙事詩」等といった分類づけが殆んど意

味をなさぬ境位で、この書は書かれている。それはまた、そうした既成の「ジャンル」、「形式」の上に無反省に立って安易に言葉を重ねてゆく態度への暗黙の批判ともなっている。

だが、ではこの書は、「形式」を無視した、例えば「情念の流れるが儘に」書かれた類のものだろうか？ 正反対である。むしろ、これは極めて入念な反省と精緻な計算の上に築かれた形式の美の書だと言つてもよい程である。

少しく具体的に見てみよう。表題と献辞に次いで本書の言語宇宙を披くものは、「越境の騎馬傾ぎつつ死者と超ゆ」の一句であり、本書を閉づるものは、「歩き巫女枯銀河見てまた帰る」の一句である。この、思わぬほどに端正な二句に挟まれて、「水神伝説」は語り出され、語り収められる。(前者とともに日常の平板な言語地平を超えゆき、後者とともに壮大な恋と憧憬の満ちた異次元言語宇宙より帰るのである。)その構成を詳しく記せば、第壹章 伝説以前——民族の靈が呼ぶ(「呼郷」以下四篇の「詩」、第貳章 水神伝説——靈の鏡は汝を映す(「鎮魂咒」以下二十三節。そこにはいわゆる「小説」の文体から「抒情詩」、「祈り」、祝詞の形式による「咒」等、自在に多様な言葉が各節毎にちりばめられている)、第參章 伝説以後——原像の輪廻(「水月」以下十節。同様である。「神墜」の節にはカバラのセフィロートを思わせる五芒星型の一種の宇宙図コスモロジーが提示される)、第肆章 水神伝説拾遺——残響の末裔の靈は(「地底湖流星」以下七篇の

「詩」、および本書全体にかかると思われる三首の「反歌」。

こうして一節毎に文体を変え、形式を転じて構成される本書は、したがって一種の形式の戯れとさえ読むことができる。言語芸術とは、—— 広くは芸術とはそもそも、本来の意味での（言語の）戯れであるとするなら、こうした「形式」の戯れは、言語芸術としてのその芸術性の徹底でありこそすれ、芸術本来の姿からの逸脱ではありえない。（著者は或いは、むしろ「逸脱」こそが芸術性なのだ、との言い方を好むかもしれないが。）しかもこの形式の戯れは、右に示したようにに美事なまでに均勢のとれた全体構成の中に収めとられている。丁度一人一人は自由に遊戯するかに見える踊り子たちが、全体としては一人の演出家の一貫した意図に統禦されてこそ真に美しい舞踊芸術が成立するように、本書にもその言葉の舞踊を統括し、全体の秩序を構成して美しい言語宇宙^{コスモス}と為している一つの強力な意志が存在する。それこそが、「水神佳苗の霊に捧ぐ」との献辞の示すように、著者が佳苗と呼ぶ或る少女への想いであり（但しこの少女は、著者にとって永遠の憧れの対象たる他者であると同時に、著者^{||}主人公と双生の兄妹である程に著者自身である筈の存在である）、またその想いを神話的・宇宙的規模で言語の中に実現して行うとする意志である。

余りに深い想い、強い念いは、何らかの「形式」を得ずしでは言葉に成りえない。ここに言葉の秘密があり、「形式」

の秘儀がある。明確な形式を意志するものは、これは決して「内容」を拘束する意味での形式主義ではなくて、むしろ「内容」たる情念が深ければ深いほど、情念自体が自らを表現する「形式」を求めるのである。これが本書のもつ一見雑然たると同時に整然たる全体構成の意味するところに他ならない。

そして本書の構成が依っている基本の構造は、おそらくは水神氏の造詣の深い神道における言語儀式、祝詞などのそれなのであろう。即ち、神々の世界、霊の世界への言葉による呼びかけ、呼び出しであり、且つその言葉自体の奉獻である。そしてここに伝統の「言霊」思想を思い併せるならば、そうした言葉の喚起とは即ち事柄そのものの喚起であり、かくて言語宇宙の形成は宇宙そのものの形成に他ならない。本書こそは、著者水神祥氏の、詩的^{||}神話的—言霊的言語による自己形成、或いはむしろ、氏の生きる世界・宇宙の真の現実を産出する産出行為そのものなのである。

最後に一言だけつけ加えると、本書には、幾葉かのきわめて美しい水彩画と写真がちりばめられている。これらはいわゆる挿絵（物語の絵解き）ではないが、語の本来の意味での、本書への「イラストレーション」（光を当てること）となっている。色刷でないのが惜しまれる。（早稲田大学講師）

■泰流社、一九八四年一月二十八日刊。

四六判、一七一頁。一五〇〇円。